『白蛇伝』の発展

―怪談から報恩譚へ―

阿部泰記

一　はじめに

『白蛇伝』の故事は南宋時代に街巷で語られ、その内容は明代に編纂された『警世通言』二十八巻「白娘子永鎮雷峯塔」に記されている。それによれば白蛇は青魚とともに妖怪であり、若い男性を誑す邪悪な存在であるために高僧に調伏されることになっている。ところが後世の作品において白蛇は夫を助けて薬材店を繁盛させる良妻に変身し夫を助けるために毒性を発揮する。もともと白蛇の毒性は恐怖の対象であり、高僧等の法力によって調伏されることが期待されるのであるが、他方ではこの作品に登場する許宣のような無力な庶民を救う強力な存在として庶民からその作用の発揮が期待されていることも事実である。これは民間における伝統的な蛇信仰の反映であり、ここに後世において白蛇の存在が正当化されその毒性が肯定された理由がある。『白蛇伝』はこのように庶民の白蛇に対する恐怖と信頼とが交錯して反映する特異な作品と言えよう。以上のことに留意しながらこの故事の発展について考察を加えることにする。使用したテキストは以下のものである。

①話本「白娘子永鎮雷峯塔」（『警世通言』二十八巻、一六二四刊）

明田汝成『西湖遊覧志余』（嘉靖二十六年刊）巻二十に、

杭州男女瞽者、多学琵琶、唱古今小説平話、以覓衣食、謂之「陶真」。大体説宋時事、蓋汴京遺俗也。或説『紅蓮』・『柳翠』・『済顛』・『雷峰塔』・『双魚扇墜』等記。皆杭州異事、或近世所撰作者也。

と記す杭州を舞台にした唱本（語り物）のひとつである。刊行されたのは明代であるが、地名・官職名などに宋代のものを用いており、南宋時代以来のテキストと考えられる。

②黄図珌『雷峯塔』伝奇二巻三十二齣（清乾隆三年看山閣刊本、一七三八刊）―傅惜華『白蛇伝集』（一九五五）所収。

話本をほぼ忠実にドラマ化した作品である。原本の巻首に、乾隆三年八月十二日峯泖蕉窗居士の自序がある。

③旧抄本『雷峯塔』伝奇三十八齣―阿英『雷峯塔伝奇叙録』（一九六〇）に梗概を載せる。

未見。傅惜華『白蛇伝集』によれば、方成培『雷峯塔』伝奇の底

本。黄図珌『看山閣全集』所収「南曲」巻四に、「方脱稿、伶人即堅請以搬演之、遂有好事者、続『白娘子生子得第』一節。」とあり、この作品を指すものと思われる。成立年代は不詳であるが、傅惜華は乾隆の初めと推測する。

④方成培『雷峯塔』伝奇四巻三十四齣（清乾隆三十六年水竹居刊本、一七七一刊）－上記『白蛇伝集』（一九五五）所収。旧抄本『雷峯塔』伝奇に基づいて作られた作品である。乾隆三十六年の自序がある。

⑤小説『雷峯塔奇伝』（嘉慶十一年一八〇六刊）－『義妖白蛇全伝』（一九八九・春風文芸出版社版）所収。呉炳の序文によれば、「余友玉山主人、博学嗜古之士也。過鎮江、訪故迹、咨詢野老伝述、網羅佚失旧聞、考其行事始終之紀、稽其成敗廃興之故、著為雷峰夢史一編。」とあり、前作を踏襲しながらも、新しい伝説も提示している。嘉慶十一年の序文がある。

⑥弾詞『義妖伝』（原本嘉慶十四年一八〇九刊）－陳遇乾原稿・陳士奇／兪秀山評定『繡像義妖全伝』四巻五十三回（民国石印本）。白蛇の報恩談とした作品で、情緒的な叙述を特色とする。譚正璧・譚尋『弾詞叙録』の梗概があるが、省略が過ぎてあまり役に立たない。早期の刊本は嘉慶十四年のものがある。

⑦小説『白蛇伝』前集（民国石印本）－『義妖白蛇全伝』（一九八九・春風文芸出版社版）所収弾詞『繡像義妖全伝』四巻五十三回（民国石印本）を小説に書き換えた作品である。

⑧兪筱云口述弾詞『白蛇伝』（一九八七・上海文芸出版社版）弾詞『繡像義妖全伝』四巻五十三回（民国石印本）を現代風に修正したテキストである。

二　白蛇の精の人間界への到来

白蛇の精は人間に化けて若い商人の前に現れる。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では、冒頭で西湖の歴史について述べた後、南宋紹興年間のこととして許宣という生薬店の店主の孤児を登場させる。彼は父母を亡くして小役人の姉婿李仁のもとに身を寄せ表叔（母方の叔父）李将仕の生薬店の主管（番頭）を勤めている。彼は保叔塔寺の僧の勧誘を受けて清明節（春分後十五日目）に墓参りをした際に雨に遭って船に乗って帰宅しようとする。その際に侍女を同伴した女性が同船を求める。彼女は白殿直（宮中に宿直する武官）の妹で亡夫の墓参りに来たと告げ、商人の孤児に自分たち二人は「宿世の姻縁」があると告げて近づく。この女性と侍女は最後に高僧法海によって本来の白蛇と青魚の姿に変えられるのであるが、読者には最後まで真相は知らされず、女性が鍵も用いず官庫から銀を盗んだり青天の霹靂とともに姿を消したりする場面は読者の目に不気味に映る。これは「霊怪」（怪奇小説）特有のストーリーのパ

ターンである。

ここに言う「宿世の姻縁」は曖昧な表現ではあるが、仏教的色彩を強める後世の作品において、白蛇の精と若者の結びつきを説明する重要な根拠とされる。

またここでは白蛇の精は単なる妖怪であるが、この故事をドラマに翻案した黄図珌『雷峯塔』伝奇の「慈恩」齣では、釈迦のもとで修行しながら途中で放棄した畜生として、次のように説明される。

今東溟にいる白蛇と青魚は、達磨が蘆に乗って江を渡るときに折れて水に落ちた蘆の葉を呑み込んで道を悟り、修行して千年余になる。ところが畜生は清浄に帰依することを忘れて下界に降りることを妄想している。許宣はもともと捧鉢侍者であり、白蛇とは宿縁があるため凡胎に降生させて俗世の姻縁を遂げさせ、法海に妖魔を調伏させ苦行の功が成った後に西方へ迎え仏教に帰依させよう。

そればかりではない。続く「舟遇」齣では白蛇を西湖の主とする。これは蛇を水神とする伝統的な信仰の反映である。また「彰報」齣では「放生池」である西湖で魚類を捕獲する漁師に報復し、「懺悔」齣では高僧法海が漁師の殺生を戒めて転職を勧める。これは蛇を水神として崇拝する信仰と仏教が合致したものと言えよう。

旧抄本『雷峯塔』伝奇「仏示」齣でも、諸仏が許宣と白蛇の「宿縁」を示し、法海が二者の「宿縁」が満了してから白蛇の精を鎮めて許宣とともに極楽に帰ることを語る。ここまでは黄図珌『雷峯塔』伝奇と同じである。だが新たに設定された「降凡」齣では、黒風大仙が妹白雲仙姑に俗念を断ち切るように説得するが、仙姑は聴かず人間界に降りることが演じられる。ここで白蛇は「白雲仙姑」と呼ばれ、妖怪から仙女への転化がうかがわれる。これは仏教に加えて道教の観念が取り入れられたからである。これとともに白蛇の法力も強化され、西湖で魚類を統括している青魚の精を征服して侍女とする場面（「収青」齣）、端午節に蛇体を露呈して夫許宣の命を奪ったために南極星から霊芝を分けてもらう場面（「端陽」・「求草」・「救仙」齣）、僧法海から夫を取り返すために金山寺を水攻めし、その際文曲星が投胎していたために法海の宝鉢による調伏を免れる場面（「水鬪」齣）が新たに設定されたりする。人間の子を宿すことができたのも仙女なればこそであった。

方成培『雷峯塔』伝奇も旧抄本『雷峯塔』伝奇とほぼ同内容であるが、道教的色彩はさらに強められ、冒頭の「付鉢」齣では、白蛇は西王母の蟠桃を食べて悟りを開き修行していると釈迦が述べ、次の「出山」齣でも、白雲仙姑は西池蟠桃園から黒風大仙の住む峨嵋山連環洞に移って人間界を思念していると述べられる。

以上は白蛇の精が修行を途中で放棄して邪心を抑えきれずに人間界に降りたとする作品群である。小説『雷峯塔奇伝』第一回でも、白蛇は四川青城山清風洞で修行していたが、ふと人間界が見たくなって杭州に遊びに出かける。途中、真武北極大帝に見咎められて、南海の観音菩薩に会いに行くところだと嘘をつき、これが嘘であれば

後に雷峰塔下に鎮圧されるであろうと誓う。ところが第十二回では、白蛇は法海の鉢で調伏された際に、許宣に報恩するために人間界に降りたと告白する。

私は四川青城山清風洞の白蛇です。長年洞の中で修行をしておりましたが、遊びに出て酔って山中で寝てしまい、うっかり姿を露呈して乞食に捕まって売られようとするところを旦那さまに見られ、お金を出して山中に放していただいたのです。私はとても感謝し、旦那さまに後継ぎができないことを知り、下山して旦那さまと結婚して後継ぎをお授けし、大恩に報いたのです。

ただ小説『雷峯塔奇伝』の場合、第一回では白蛇が人間界へ降りた理由を単なる人間界への興味からとしか記しておらず一貫性を欠いている。これを最初から報恩のためとした作品は、弾詞『義妖伝』からである。弾詞『義妖伝』第一回「仙蹤」は次のような内容である。

芯芝仙姑の弟子素貞は六支という号を賜り、師の命を受けて桃園を掃除して霊芝を採取していると、西池金母が驪山老母を案内して来る。金母は素貞の俗縁が終了していないので下界に貶そうとすると驪山老母が張果や南極山翁の鶴鹿仙童も異類であるから白蛇も仙人になれると言う。金母は素貞に前身は白蛇で漢光武巳年巳日巳時に龍精から生まれたこと、乞食に殺されようとするところを善士に救われたことを話し、転生した恩人に報恩して後仙人になれると告げ、錦嚢と「遇黒而明、逢青而有。見海而驚、聞雷而寂。」という偈を与え、白を姓として生霊を傷つけないよう警告する。

これによれば、白蛇は天界の命を受けて下界へ降りたのであり、白蛇が邪心を抱いて天界を逃亡したとする従来の作品群とは異なり、白蛇の行為はすべて善意に出たものとしたところに特徴がある。

そして白蛇の報恩という発想は、白蛇の行為に積極性・正当性を与えることになった。第十二回における前述の白蛇の告白は次のように続く。

旦那さまの家が貧困なので、銀を盗んでお贈りしたために、旦那さまは姑蘇へ流罪になりました。私は小青と一緒に姑蘇へお供して、媒人を立てて結婚し、薬を精製して旦那さまをお助けしました。後に端午節を祝って、旦那さまから雄黄酒を飲むよう強要され、蛇の姿を露呈して旦那さまが驚きの余りお亡くなりになり、私は命がけで南極仙翁のもとへ行って回生草を求め、旦那さまのお命をお救い致しました。旦那さまから真相を見破られるのを恐れて、法術を用いて目を欺いたのです。私は朝晩苦労して家計を助けました。後に祖師（呂洞賓）の聖誕日に、良からぬ医者たちが旦那さまに宝物を陳列するよう迫りました。私は旦那さまが心配されると思い、小青と一生懸命に考えて、王府の宝物を盗み出して、旦那さまのご心配を無くしたのです。ですが旦那さまの誕生日に客間に陳列して、王府の家人に捕ら

えられ、有罪におなりになったのです。幸い蘇州府の陳長官のお計らいで、軽い刑で済み、鎮江へ流罪となりました。私は小青と相談し、お金をまとめて、お姉さまのお宅へお送りした上で、鎮江へ旦那さまを捜しに行きました。前世でご恩をお受けしたため、旦那さまが何度お見限りになりましても、お恨み申したことは一度もございません。後に旦那さまは金山寺へお遊びの節、お坊様に引き留められました。私は夫婦の情が捨てがたく、小青とともにお捜しし、金山寺を水没させて、鎮江の生霊を殺害するという大罪を犯しました。……

ここでは白蛇の精が鎮圧される理由も、若い男性につきまとうという従来の漠然とした理由から、洪水を起こして生霊を殺傷したという具体的な理由へと転換している。これは白蛇の精が男性の生気を吸い取るという妖怪的性格を有しないため、明確な鎮圧の理由が自然に求められたためであろう。そしてこの理由は後続する作品に採用されることとなった。ただ前述のように第一回では、白蛇の精が人間界へ降りる途中、真武北極大帝に見咎められて嘘をついたため雷峰塔下に鎮圧されるとしており、話が矛盾する。これは話の発展段階での試行錯誤の結果だと考えられる。なお小説『白蛇伝』前集は弾詞『義妖伝』を小説に書き改めた作品であり、第一回「仙蹤」の内容は弾詞『義妖伝』と同じである。また兪筱云口述弾詞『白蛇伝』も先行する弾詞『義妖伝』を継承する作品であり、第一回「游湖」では、白蛇の精は命の恩人である許仙に黎山老母の命を受けて命の恩人である許仙に報恩するために下山すると記す。

三　白蛇伝の展開

以上のように白蛇伝は、伝承の過程で怪談から報恩談へと変化したが、物語の中心も白蛇の精が神仙になるために報恩の難行を果たすことに移行していった。今、大きく展開した部分について見てみよう。

（一）　財を贈る

白蛇の精は若い番頭に結婚資金を与える。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では、白娘子は結婚費用として許宣に銀一錠渡すが、それが邵太尉の庫から盗まれたものと分かり、捜査の手が及ぶや、おとなしく残りの四十九錠を置いて姿を消す。この白娘子の行為は蛇の神出鬼没の行動を反映させたものと考えられ、以後、黄図珌『雷峯塔』伝奇・旧抄本『雷峯塔』伝奇・方成培『雷峯塔』伝奇・小説『雷峯塔奇伝』では、いずれも白蛇の精はひそかに逃走するとしている。

だが弾詞『義妖伝』に至って、白蛇の精白氏は積極的に行動して司法官を翻弄する。すなわち、白氏逮捕に赴いた捕吏たちが青蛇の精小青を捕らえようとすると彼女は帚に変身し、知県は縄を掛けられた帚を小青と思い込んでこれを焼くし、白氏は鎖を掛けられる際

に旋風とともに消えて鎖は地方（保長）王十千に掛かり、知県は白氏の姿をした王十千を見て白氏を捕らえたと思い込み、その口を打つと王十千が姿を現すのであり、逮捕は完全に失敗に終わるのである（第五回「踏勘」）。そこで知県は自ら現場に赴いて白氏の素姓を質す。その際、白氏が驪山老母から風雨を呼ぶ法を伝授され、過去を知り陰陽を占うことができると告げ、知県の経歴を言い当てて、許仙を釈放しなければ疫病で知県の家族を病死させると脅す。知県は仕方なく許仙を蘇州二年の徒刑に処し、棒打二十を加えようとすると、白氏は見るに忍びず、苦痛を知県の下女上がりの第二夫人に移し、知県は茶碗の底に書かれた家人からの伝言でそのことを知って、棒打を中止させる（第六回「訊配」）。

この滑稽な場面は、司法官の愚劣さを描写するとともに、白蛇の精の司法官に対する優越性を誇張している。それは白蛇の精の窃盗行為が貧民を救済するものとして歓迎すべきものであったからであろう。

ただ窃盗行為そのものは法律上許されるものではない。よって現代の弾詞『白蛇伝』ではこれに工夫を加え、知県の審問に対して白氏が、知県の汚職を懲らしめるために黒風大仙が県庫の銀を盗んだと告げ、知県が罪の露見を恐れるという一齣（第五回「出醜」）を設けており、知県を悪人とすることによって、白蛇の精の窃盗行為に正当性を与えている。

（二）　蘇州における薬屋の開業

白蛇の精は若い番頭に独立した店舗を経営させる。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では、蘇州へ流罪が決まった許宣に対して、表叔李将仕が牢獄の范院長と旅館の王主人への紹介状を持たせ、許宣は二人の尽力で保釈され、王主人の家に住むことになる。だが何によって生計を立てたかは記していない。黄図珌『雷峯塔』伝奇も同じである。

ところが旧抄本『雷峯塔』伝奇に至って、許宣が王主人の仲介で許宣を追って蘇州に来た白氏と結婚した後、薬屋を開業する場面が設けられる（「開店」齣）。方成培『雷峯塔』伝奇「避呉」齣では、許宣の姉婿李仁は許宣を庇って蘇州の旅館の店主王敬溪のもとへ避難させるとし、許宣は蘇州へ流罪となるわけではないが、やはり許宣を追って来た白氏と結婚した後、白氏の勧めによって家を借り薬屋を開業する（「開行」齣）。ここですでに白蛇の精は夫君を支える賢明な細君として描かれており、若い男性を誑す妖怪ではなくなっている。

そして小説『雷峯塔奇伝』に至っては、ストーリーは飛躍的に発展する。

まず、許仙は蘇州の旅館に寄宿するのではなく、薬屋の主人王員外の紹介状によって蘇州の薬屋呉仁傑の手伝いをし、許仙を追って蘇州に来た白氏と結婚した後、呉員外から資金の援助を得て薬屋保安堂を開業すると記す。ここには人情の有り難さが強調されている

が、これに続いて人間の力では克服できない危機に対する白蛇の精の魔術がまたも期待されるのである。すなわち、開店後一月たっても客が来ないので、許仙が白氏に相談すると、白氏は黎山老母の弟子で法術を伝授されて過去未来のことを予知し、妖怪を駆除して万病を治療することができると許仙を慰め、天文を見ると近く疫病が流行するので救瘟丹を煉って一粒銀三分で売ればよいと言って、小青に池や井戸に毒気を散布させ、薬を売って商売は大繁盛するのである（第三回）。

この小説『雷峯塔奇伝』の薬屋開業の場面は、弾詞『義妖伝』に継承・発展せられ、恩人を一人前にするためにやや強引な手段を用いる白蛇の精の一途さが克明に描き出される。すなわち、許仙は薬屋王員外から蘇州で薬屋を営む弟王永昌の大生堂を紹介される。白氏は小青と五鬼が吸い寄せた遊び人や賭博上の銀を使って家財を購入して舟に積み、太僕卿王錫章の姪を名乗って蘇州専諸巷の王錫章の留守宅に住み込む（第六回「訊配」）。留守番の老人陸三には王錫章の書信を見せて信じさせ、近所には夫君は許仙だと知らせる。その頃許仙は駅吏に乞食を命じられていた（第七回「逼丐」）。許仙はある日薬屋大生堂を訪ねて王員外の手紙を渡し、王永昌は保釈金を出して許仙を引き取り、薬屋の手伝いをさせる（第八回「駅保」）。許仙は人参代金の集金をして専諸巷で白氏に再会する（第九回「復艶」）。許仙は白氏の家に住むことになり、白氏は許仙に薬屋を開業させるため、許仙と王永昌との離間策を講じ、故意に出勤前の許仙に家事を言いつけて遅刻させたため、王永昌は忍耐できなくなる（第十回「客阻」）。王永昌は終に番頭たちの讒言を信じて、許仙に気にいらないなら自分で開業せよと言い放つ。白氏は時期至れりと喜び、許仙に開業する資金があることを教え、許仙は早速王永昌に辞職を申し出る。王永昌は許仙の薬屋を廃業させて許仙を奪回しようとたくらみ、黴の生えた薬材や腹水を病む丁稚を斡旋する（第十一回「辞夥」）。許仙が薬屋保和堂を開業すると、王永昌は白氏の才覚を調べに来るが、白氏はその意図を悟って吝嗇な王永昌から「見礼金」を要求する。保和堂は果たして劣悪な薬材のために二日目に閉店する。しかし白氏は古くなった薬材が腹痛に効くと言い、蘇州の民が殺生し過ぎ五穀を粗末にするため天がまもなく疫病を降らすので、一袋三銭の薬を準備させる（第十二回「開店」）。許仙は番頭に徹夜で薬袋を作らせ、城中に腹痛薬の広告紙を張り、白氏は下界に降りる時に吐き出した毒気のある黒水を小青に空中から城中に散布させる。これによって保和堂の薬は大いに売れる。王永昌もこれに倣って薬を腐らせるが、その頃には民の腹痛も収まり、大損をする（第十三回「散瘟」）。

なお弾詞『白蛇伝』も弾詞『義妖伝』とストーリーをほぼ同じくするが、毒気を城中に散布することや古い薬材の効用を認めず、白氏は運河の氾濫による疫病の蔓延に着目して、古くなった薬材の中からまだ黴の生えていない薄荷（はっか）・鈎藤（かぎかずら）・甘草（かんぞう）等を調合して腹痛薬を作ったと修正している（第

十三回「包薬」）。

（三）　道士との対決

白蛇の精は若者と幸福な生活を送っていたが、道士が許宣に妖怪が執り憑いていると指摘したことから、二人の生活は破壊されそうになる。白蛇の精はそこで道士と対決する。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では、許宣は二月半ばに承天寺の臥仏を見物し、終南山の道士から霊符を授かり、三更に焼けと教えられる。白娘子はこれを発見して霊符を焼くが変化はなく、許宣とともに道士に会い、その霊符を呑んで妖怪ではないことを示し、逆に呪文を唱えて道士を宙に吊す。黄図珌『雷峯塔』伝奇も話本とほぼ同じ内容である（「求利」・「呑符」齣）。旧抄本『雷峯塔』伝奇もほぼ同内容であるが、時を四月十四日の呂洞賓の誕生日「神仙生日」とする（「行香」齣）。また道士は青児と四鬼に辱められて張天師府に帰って修行し、後に復讐のために再度出現することになる（「逐道」齣）。方成培『雷峯塔』伝奇もこれとほぼ同じであるが、道士は茅山に修行に行くとする（「贈符」・「逐道」齣）。小説『雷峯塔奇伝』では、道士を茅山道士とし、白氏は道士と対決して許仙が支払った符薬の代金四両を奪還する（第四回）。

だが弾詞『義妖伝』ではこの部分はかなり詳細に述べられ、白蛇の精の存在を際立たせている。白氏は道士に使役される天神の黒虎玄壇趙天君に向かって、金母の命を受けて報恩のために下界に降りたのであり決して殺生をしていないと訴えて、天神の捕縛を免れる。彼女はまた許仙の吹きかける符水の肌に突き刺す痛みに耐え抜いて妖怪ではないことを証明する（第十四回「贈符」）。さらに許仙が符薬の代金に当てた人参を取り返すために道士と対決し、五鬼に道士を押さえつけさせる（第十五回「闘法」）。この「闘法」の場面は、本来道士が瓢箪から白鶴を出せば白氏が綿花を老寿星に変えて鶴に乗せ、道士が令牌・宝剣を使えば白氏はこれを打破して道士を宙に吊して鞭打を加えることを述べるのであるが、陳遇乾の弾詞『義妖伝』では、城中での騒ぎは不合理として法術比べの場面は削除している。

弾詞『白蛇伝』は弾詞『義妖伝』の内容を継承した作品であるが、呂洞賓が蘇州で有名な陸稿薦鍋肉店へ出かけて留守の間、側に控える柳樹精が代理で白氏の訴えを聴き容れ、道士が令牌で降魔神人を呼ぶと柳樹精がこれを追い払うことや、道士が斬妖剣を使うと呂洞賓が帰廟して剣を奪うことを述べ、弾詞『義妖伝』が削除した場面を復活させて精彩のある一段としている。

（四）　恩人の死と蘇生

端午節は毒虫を避ける風習があり、これがこの故事に反映している。白蛇の精は若者から雄黄（ゆうおう）の粉末と蒲の根を刻んで入れた魔除けの「雄黄酒」を飲まされたために蛇体を露呈し、これを見て驚きの余り命を落とした若者を蘇生させるために、寿命を司

る寿星のもとへ仙草を求めに行く。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では、この場面はない。ただ後に鎮江の好色な薬屋李克用を脅すために白蛇の精は蛇体を露呈しており、これが端午節で許宣を脅かす場面のもとになっていることは明らかである。黄図珌『雷峯塔』伝奇にも端午節の一場面はない。

端午節の場面が設けられるのは、旧抄本『雷峯塔』伝奇からである。この時、白氏は懐妊していた。許宣はこれを知って喜び、白氏に雄黄酒を飲むことを強要し、白氏は蛇体を露呈して許宣を死なせたため、嵩山の南極仙翁のもとへ起死回生の仙草を取りに行くのである（「端陽」齣）。嵩山では、東方朔・鹿鳴大仙と闘って彼等を破るが、八卦雄黄陣によって白鶴に捕らえられる。（ここには鳥が蛇の天敵という発想が反映している。『山海経』「大荒南経」には、黄鳥が巫山に置かれた天帝の八倉薬物を付近の玄蛇から守る記事が載せられており、この話の源流と考えられる。）だが寿星は白蛇の俗縁が満了していないとして、白蛇の精に仙草を与える（「求草」齣）。方成培『雷峯塔』伝奇も旧抄本『雷峯塔』伝奇と内容をほぼ同じくする。相違は、嵩山の仙人の中に葉方善が登場し、彼が岩を雄黄山に変えて白蛇の精をその下に鎮圧することである（「端陽」・「求草」齣）。

小説『雷峯塔奇伝』では、端午の「鬧龍舟」の風習を加え、蛇体を露呈した白蛇の精が許仙に龍舟見物を勧めるが、心配で帰宅した許仙に蛇体を見られるとする（第四回）。また仙草を求める場面も異なり、観音菩薩の助力によるものとするところに特色がある。白蛇の精はまず瑶池に仙丹を求めに行き、白猿を傷つけたために金母を怒らせるが、観音菩薩が金母にこれを許させる。観音は白蛇の精に紫微山南極宮の南極仙翁から仙草を求めよと諭し、仙翁も回生草を渡すが、白鶴が追いかけて来て、白蛇の精は空から墜落して死ぬ。しかし観音に仕える鴛童が呪文を唱えて蘇生させる（第五回）。

弾詞『義妖伝』では、さらに端午節の正午に許仙が五毒を駆逐するための蚊煙（蚊取り線香）を焚き、白蛇の精を苦しめることを加える（第十六回「端陽」）。また起死回生の仙草は崑崙山の南極仙翁のもとに取りに行くとする（第十七回「現迹」）。白蛇の精は呂洞賓の侍者黄衣童子で主人の使いで仙翁と蟠桃会の群仙選考の時期について相談に来たと偽り、鹿童が仙翁に伝達する間に仙草を盗んで逃走する。そして鶴童から頭を啄まれるが、仙翁に救われる。仙翁は鶴童を窘めて、白蛇の精は将来文曲星を懐妊する身であり、彼女を傷つけてはならないと言う（第十八回「盗草」）。なお小説『白蛇伝』前集・弾詞『白蛇伝』も弾詞『義妖伝』の内容をほぼそのまま継承している。

（五）　再び財を贈る

白蛇の精は若者に妖怪に生気を吸い取られた官吏の子を治療させて一財産を作らせる。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では、まだこの場面は見られないが、

許宣は四月八日の承天寺の灌仏会に携帯した扇子の下げ飾りが質屋周将仕（将仕は員外と同様、商人の旦那に当る）の家から紛失した品物であったため盗賊として逮捕され、この時も前回同様に白娘子は盗品をすべて返して姿を消すという場面があり、これが後世の話へと発展していく。黄図珌『雷峯塔』伝奇も話本のストーリーをそのまま踏襲している（「驚失」・「浴仏」・「被獲」・「妖遁」齣）。

旧抄本『雷峯塔』伝奇もこれを踏襲するが、内容がやや異なる。亀の精が蕭太師（天子の補佐官）の八宝明珠巾を盗み（「窃巾」齣）、白氏がそれを許宣に持たせて虎丘の桂花見物に行かせ（「告遊」齣）、許宣は捕吏に捕らえられる（「被獲」齣）。事件を担当した李総捕は前銭塘県令であり、白氏を連行するが、途中で捕吏にすりかわっていた（「審問」齣）。因みにこの「審問」齣は、前述（一）「財を贈る」の弾詞『義妖伝』の白氏が地方王十千にすりかわっている場面に生かされている。方成培『雷峯塔』伝奇もこの旧抄本『雷峯塔』伝奇にほぼ同じ内容である（「虎阜」・「審配」齣）。

小説『雷峯塔奇伝』は上記の諸本と著しく内容を殊にする。白氏は蘇州知府陳倫の夫人呉氏が難産であることを知って、観音菩薩に変身して呉夫人の夢に現れ、薬屋保安堂の許仙が名医であると告げる。そして許仙に夫人は双子出産であることを教えて処方箋を示す（第五回）。夫人は丸薬を飲んで無事双子を出産し、謝礼として銀千両を許仙に与える。これを知った医師たちは嫉妬して三皇廟に集まり、三皇祖師（伏羲・神農・黄帝）の生誕節を骨董品を陳列して祝うことにして許仙を辱めて追放しようと陰謀をめぐらす。白氏は許仙の窮地を救うために、小青に命じて京都の梁王府から宝物を借りさせ、小青は王府から珊瑚樹・玉孩童・沈香麒麟・瑪瑙孔雀を盗み出す。これによって許仙は医師たちの鼻を明かすことはできたものの、窃盗の罪で逮捕されるのである（第六回）。

弾詞『義妖伝』は小説『雷峯塔奇伝』のストーリーに小青の嫉妬という要素を加えて大幅に改訂している。すなわち許仙を七対三の割合で共有しようと白氏と約束していた小青は、小青が修行が足りず人間を害すると言って許仙を譲らない白氏に不満が高じて白氏のもとを去り、嫁ぎ先を逃走した嫁と偽って蘇州崑山県の工部尚書の公子顧連を蠱惑する（第二十回「婢争」）。顧連は精力が枯渇して病に倒れ、心配した母親が僧道を呼んで祈祷するが、妖怪を鎮圧できない。白氏は占いでこれを知り、観音に変身して母親の夢に現れて保和堂の許仙に妖怪退治を依頼せよと告げる。顧家が銀千両の聘礼を持参して保和堂を訪れると、白氏は許仙を崑山県に赴かせる（第二十一回「聘仙」）。許仙は妖怪が人を食うと聞いて恐れ、白氏を恨む。白氏はこれを知って、小青に小青は前世は観音菩薩の龍女であり、顧連は揀香童子で龍女を見初めて人間界に貶されたことを教え、顧連を害することを戒める。小青は仕方なく夜壺（夜間用便器）の精を装って姿を消し、許仙の妖怪退治を成功させる（第二十二回「降妖」）。許仙は寿星の仙草を顧連に与えて命を救う。白氏は顧家からの謝礼六千両を許仙に故郷の杭州の姉夫婦のもとへ送ら

せ、将来杭州へ戻った時のことに備える（第二十三回「慮後」）。

時は移って蘇州の仲秋は彩燈を掛け仏を祭り、これに地元のやくざが絡んで寄付を集めていたが、保和堂だけが寄付しなかったので、彩燈や鼓手が手配できなくして杭州人の許仙を嘲笑する。相談を受けた白氏は家宝があると許仙を慰め、他方で小青に顧家の宝物を持ち出させる。小青は鈞天奏楽神仙図・八卦時辰香炉・羊脂玉浄瓶の三宝を盗み出すが、ついでに顧連に声をかけたため、顧連は許仙に妖怪退治を要請しに自ら蘇州に赴く（第二十四回「賽盗」）。顧連の家人は陳列された顧家の宝物を見て疑いを抱き、顧連も小青を見て夜壺精だと認め、許仙を詐欺師として呉県に告訴する。呉県令は奇しくも前銭塘県令周士傑で、白氏の連行を命じる。白氏は許仙と暫時離別の運命にあることを知って、薬屋を閉店し資材を鎮江に運搬させる。また轎に乗る際に、死ぬ前に轎に乗りたがっていた貧民の老婆とすりかわったため、捕吏は死者を呉県に運んでしまう。県令は王永昌に許仙を引き取らせ、許仙は再び大生堂で働く。

以上は小説『白蛇伝』前集でも同じ内容である。なお弾詞『白蛇伝』では、この部分は小青の品格を傷つけるとして削除している。

（六）　鎮江の好色な薬屋を懲らしめる

白蛇の精は貞操が固く、金持ち老人の誘惑を拒む。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では、盗品を所持して承天寺で捕らえられた許宣は鎮江へ流罪になるが、王主人が鎮江の薬屋李克用への紹介状を与え、許宣は李克用によって保釈される。李克用は李募事の手紙を読んで許宣が薬屋の番頭だったことを知り、許仙を番頭として使い、豆腐屋の王公の二階に宅わせる。老いた張番頭は陰険な人物で主人に許宣を讒言する。若い趙番頭は張番頭を窘めて許宣にも忠告し、許宣は趙番頭に感謝して一緒に酒を飲む。その帰途、許宣は楼上から白娘子に火熨の灰を浴びせられて再会して王公の楼に同棲する。李克用は白娘子の美貌に惑い、自分の誕生祝いに招き、下女に奥の間に案内させるが、戸の隙間から大きな白蛇を見て卒倒する。白娘子は李克用が許宣に暴露することを恐れ、許宣に李克用の番頭を止めさせ、薬屋を開業させる。なおこの場面は、前述の（二）「蘇州における薬屋の開業」項において、弾詞『義妖伝』の王永昌の薬屋の番頭の嫉妬と、白氏が許仙に薬屋を開業させる構想に反映している。

黄図珌『雷峯塔』伝奇はほぼ話本に準じて脚色されているが、番頭が許宣に同僚の嫉妬を招かないように酒宴を設けさせ（「薬賦」齣）、白娘子が鎮江では母舅（母方の叔父）の家に住む（「色迷」齣）とする点が異なる。なお後者は、前述の（二）「蘇州における薬屋の開業」項において、弾詞『義妖伝』の白氏が太僕卿王錫章の姪を名乗って蘇州専諸巷の王錫章の留守宅に住み込む場面（第六回「訊配」）に反映している。

旧抄本『雷峯塔』伝奇もほぼ話本と同内容であるが、王主人が紹介する鎮江の薬屋を何斌とし（「投何」齣）、白娘子は好色な何斌を

「大頭鬼」に化けて懲らしめるとする（「賺淫」齣）。これは蛇体を現す場所を許宣の前だと改めた結果であり、後続の作品群も白蛇の精は蛇体を現すとせず、おおむね亡霊に扮して好色な薬屋を脅すとしている。方成培『雷峯塔』伝奇は旧抄本『雷峯塔』伝奇の内容をほぼそのまま継承している。

だが小説『雷峯塔奇伝』に至って、ストーリーは大いに改変され、白蛇の精の許仙への援助が強調される。すなわち白氏は小青とともに男装して杭州へ行き、許仙から託されたものだと言って蘇州で貯蓄した財産を許仙の姉夫婦に渡した後、鎮江で薬屋保安堂を開店して許仙の到来を待つのである。許仙は鎮江に護送されて呉員外の甥徐乾によって保釈され徐乾の家に寄宿するが、許仙が大病を患って保安堂の薬を買うに及んで白氏の到来が判明し、白氏が懐妊していることもあって、男女は再び和解して、許仙は薬屋を続けるのである（第七回）。ところが徐乾は白氏の美貌に惑わされて病気になり、事情を聞いた徐乾の妻陳氏が牡丹観賞に白氏を招待し、夫の願望をかなえさせようとするが、白氏は戒めの詩を残して姿を消す。

弾詞『義妖伝』ではさらに構成が詳細になり、金持ちの過去の悪行の記載も追加される。白氏は小青とともに鎮江に行って五条街に空き家を捜し、持ち主が陳員外だと知る。陳員外は好色であり、白氏の美貌に惑わされて薬屋開店の手伝いをする（第二十六回「迷途」）。白氏が陳員外をお礼に食事に招待すると、陳は楼上に首吊り自殺をした女性の亡霊が出ると言って脅し、白氏と同衾をたくらむ。陳は白氏の寝室に入るが、以前誘惑しながら見殺しにした行商人曹の夫人の亡霊が現れて陳に恨みを述べる。実は白氏は陳のこの秘密を知って小青を亡霊に扮装させて陳を懲らしめたのであった。一方王永昌は許仙が白氏を思って泣いているのを見るに忍びず、許仙を気晴らしに鎮江へ集金に行かせる（第二十七回「恋嚇」）。許仙は五条街に来て保和堂の看板を見て、白氏と再会して同棲する。さて陳夫人盧氏は陳の病因を知って夫の願望を遂げさせるため、自分の誕生祝いに白氏を招待する（第二十八回「京叙」）。夫人は白氏に酒を勧めて酔わせる。白氏は床下に陳が隠れていることを知り、故意に陳への思いを述べて陳に同床を許すふりをし、陳を盧氏の床に移して夫婦を嘲弄する。その結果、陳は気が狂って犬に噛み殺され、盧氏は出家する（第二十九回「巧換」）。小説『白蛇伝』前集もほぼそのまま弾詞『義妖伝』の内容を継承している。

弾詞『白蛇伝』も弾詞『義妖伝』の内容を継承するが、この作品では蘇州での白氏の窃盗事件を削除していることもあり、部分的に異なる。白氏は仙草で蘇生した許仙に自分が白蛇ではないことを示すために、小青に白蛇を演じさせて許仙の信用を回復する。許仙は不吉として王永昌に転居を相談し、王永昌は商売仇がいなくなることを歓迎して、白蛇が吉兆の「倉龍」であることを隠して許仙に転居を勧め、鎮江の好色な家主陳伯仁を紹介する（第二十三回「再顕」）。陳は綢緞店の番頭李建康の妻に懸想して李を冤罪に陥れてその妻に関係を迫るが、彼女が縊死したため、李も毒殺した悪人で

あった。許仙と白氏は一緒に鎮江に転居して陳の家を借りる。陳と夫人は共謀して白氏を誘惑しようとするが、白氏は上述のように術を使って逃れる。陳は病に倒れ、夢に李氏夫妻が命を奪いに来て終に絶命する（第二十四回「懲悪」）。ここでは王永昌は徹底的に許仙に恨みを抱く人物に描かれ、陳も単なる好色漢ではなく、極悪人に描かれている。

（七）　鎮江金山寺における法海との決闘

金山寺に参詣し法海に引き留められて戻らない若者を白蛇の精は連れ戻そうとする。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では、許宣は金山寺の和尚から七月七日の英烈龍王の誕生日に参詣するよう求められ、白娘子は方丈に入らないという条件で許宣の参詣を許すが、許宣が戻らないので長江の波を立てて白娘子と青青が迎えに来る。しかし、法海の一喝で二人は水に飛び込んで逃げる。ここにはまだ白蛇の精と和尚との闘いは見られない。ただ、波浪を起こすところは、後世の白蛇の精と法海との闘いの話の源となっていると言えよう。黄図珌『雷峯塔』伝奇もこの部分は話本を継承している（「棒喝」齣）。

旧抄本『雷峯塔』伝奇から初めて白蛇の精が金仙寺を水攻めする場面が設けられた。商人劉成の白檀が盗まれ、法海は白氏の仕業だと知り、許宣を訪ねると果たして白檀が昨日どこからか運び込まれたと言う。法海は白檀の寄進を許宣に要請し、菩薩の生誕節に金山寺へ参詣に来るよう勧める。白氏は許宣が方丈に入らないことを条件に許可する（「化香」齣）。白氏は青児とともに許宣を迎えに行くが、法海が許宣を返さないので、大いに怒り、法海の呼んだ哪吒・伽藍・韋駄・哼哈二将等と闘い、最後には金山を水没させる。法海は護法神に命じて水を退かせ、白氏を調伏しようとするが白氏が懐妊していて調伏できず、許宣に一旦下山を許す（「水闘」齣）。なおこの水闘で生霊を殺害したかどで、後に白氏は雷峯塔で鎮圧されることになる。

方成培『雷峯塔』伝奇もほぼ旧抄本『雷峯塔』伝奇を継承している。ただ戦闘場面がより詳細になり、白氏が護法神を敗退させたうえ法海の青龍杖・風火蒲団を破り、法海の方も袈裟を使って金山を守る場面が加えられている。なお白氏は文曲星を懐妊していたため調伏されなかったとする。

小説『雷峯塔奇伝』では、細かい部分が相違する。まず白氏が商人の白檀を盗むことは述べられず、許仙が金山寺に参詣するのは、正月に徐乾の誘いを受けて法海に会うためであったとする。許仙はそこで法海から白氏と小青が蛇の化け物だと聞かされて、帰宅しない（第九回）。白氏は金山寺へ許仙を迎え、口から宝珠を吐いて法海と闘うが、負けて敗走する。法海は禅杖で白氏を打とうとするが、白氏が状元になるべき男子を懐妊していたために、文運を司る奎星に阻まれて失敗する。白氏はこれに甘んじず、四海龍王に命じて大雨を降らせ金山寺を水没させる。法海は袈裟で金山寺を守るが、鎮

江は水害で多くの犠牲者を出し、白氏は恐れて小青とともに峨嵋山清風洞に逃げ帰るのである（第十回）。

弾詞『義妖伝』は、小説『雷峯塔奇伝』あるいは方成培『雷峯塔』伝奇によって決闘場面をより際立たせている。白氏が白檀を盗むことは述べないが、法海が白蛇と青蛇の精を調伏するために僧に観音像を彫塑するための白檀十担の布施を乞わせる（第二十九回「巧換」）。許仙は独断でこれを承諾し、白氏も仕方なく銀五百両の布施を認める。そしてこの功徳によって白氏は文曲星を懐妊する。法海は四月八日を観音像の開光の日と定めて許仙を招待するが、白氏は危険を悟って許さない。しかし鎮江知府の強い要請があり、許仙は白氏に内緒で金山寺へ赴く（第三十回「化檀」）。法海は許仙に妖気を認め、白氏が白蛇の精であり、前世の放生の恩に報いるために許仙と夫婦になったが、姻縁が満了すると災禍を被るであろうと警告し、許仙は法海に救いを求める。白氏は金釵を舟に変え波浪を起こして許仙を迎えに来、法海が許仙を返さないため、決闘となる。法海が禅杖を投げて青龍に変えると、白氏は白蛇に変身して青龍と闘う。法海は許仙に白蛇が白氏の真の姿だと教え、袈裟の下に庇護する。白蛇は口から明珠を吐いて青龍を撃ち落とし、風火蒲団も破る。法海が金鉢で鎮圧しようとすると、白氏が文曲星を懐妊しており、奎光が邪魔をして失敗する（第三十一回「開光」）。白氏はこれに甘んじず黒魚の精（黒風大仙）に救援を求め、黒魚の精は金山寺を水攻めするが、法海が龍王に命じて黒魚の精を斬首させる。白氏は許仙の子を出産するために臨安に行く。法海は許仙に白蛇の精との姻縁は終了していないと言い、寺の裏の紫霞洞を通って臨安に行かせる。白氏は断橋で故意に投身自殺を装って、引き留めようとする許仙を小青とともに責め、仲直りして先に貯蓄した銀を送った姉の家を訪ねる（第三十二回「水漫」）。

小説『白蛇伝』前集もこれをほぼそのまま継承している。ただ第一回「仙蹤」でも述べていたが、法海はもと蝦蟆の精であり、修行中に白蛇に丹薬を奪われて修行が不意になり、白蛇に対する私怨から調伏をたくらんでいたとしており、法海に対する信頼度を弱めている点に特徴がある。

弾詞『白蛇伝』も弾詞『義妖伝』を継承するが、黒風大仙を邪悪な性格に変えており、東海龍王の地位を簒奪して海洋を独占しようとたくらんで金山寺を水没させ、法海に呼び出された龍王三太子に殺されるとする点が異なる。

（八）　杭州での道士との再決闘

蘇州で白蛇の精と闘って敗れた道士が復讐を遂げようと杭州にやって来て再度決闘を挑むが、また敗退する。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では道士ではなく捕蛇者が登場する。許宣は鎮江で服役中であったが、孝宗（一一六二～一一八九）が皇太子に策立されたため、大赦に遇って杭州に帰る。その時、白娘子はすでに李募事の家に来ていた。そして許宣が白娘子との生活を拒

絶するならば洪水を起こして杭州を水没させると脅す。前述の鎮江金山寺水没の発想はこれに由来するものである。ある時李募事は白娘子の蛇体を覗き見てしまい、許宣を連れて白馬廟前の呼蛇戴先生に蛇退治を依頼するが、戴先生は白娘子に案内されて家に入り、大蛇になった白娘子を見て逃げ去る。黄図珌『雷峯塔』伝奇も話本の筋をそのまま踏襲している。

旧抄本『雷峯塔』伝奇は、許宣が杭州に戻るのを大赦によってではなく「水闘」で白蛇の精を破った法海の命によってであるとし、これ以後の作品はすべてこれに従う。しかしながら、ここでは捕蛇者も出現しなければ道士も再出現しない。方成培『雷峯塔』伝奇もまたそうである。

ところが小説『雷峯塔奇伝』では、蘇州の神仙廟で敗退した（第四回）茅山道士の陸一真人が再登場する。彼は蜈蚣（むかで。五毒の一で、蛇の天敵である）を弟子にして同伴し、昔日の報復に来る。蜈蚣が白氏を啄もうとする絶体絶命の刹那、観音の命を奉じて白氏を救助に来た白鶯童子が蜈蚣を啄み、小青は陸一真人を梱仙縄で縛り、黄巾力士に命じて東洋大海に投げ捨てる。

弾詞『義妖伝』もこれに似るが、再び端午節が到来し白氏が蛇体に変化するのを姉婿の陳彪が覗き見る場面をこれに加えており、白氏の苦難を描き出すことに成功している。白氏は端午節に祖先の墓参りを提案し、その日に階段から落ちて怪我をして留守番をする。だが陳彪は捕吏の経験からその虚偽をすぐに見抜き、こっそり帰宅して白氏が蛇体に変化する場面を目撃し、許仙にこれを告げて魔除けの刀を枕元に置かせる。これより許仙は故意に白氏を避けるようになるのである（第三十四回「二賞」）。この後、茅山道士の張英が鍛煉した蜈蚣を許仙に白氏のベッドに置かせ、白氏は絶対絶命のピンチに追い込まれるが、たまたま室内便器が倒れて屎尿が蜈蚣に降りかかって魔法が解け、白氏は危うく難を逃れ、小青は怒って道士を長江に投げ捨てる（三十五回「降蜈」）。小説『白蛇伝』前集もこれと同内容である。

弾詞『白蛇伝』でも捕吏陳文彪はやはり白氏の正体を暴こうと待ち構えるがあいにく公務で役所に召喚されてその機を逸するとし、また道士が蜈蚣で白氏を襲うことはすでに第十八回「斥道」で述べられており（その時は白氏が蜈蚣の天敵である鶏を出して退治している）、ここでは道士は出現せず白氏に大きな危機は訪れない。

（九）　指腹結婚と出産

白蛇の精と若者の姉は同時に懐妊し、もし生まれる子が息子と娘であれば結婚させることを約束する。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」と黄図珌『雷峯塔』伝奇では、白蛇は若者と結ばれることが許されておらず、従って彼等の間に子供はできない。

旧抄本『雷峯塔』伝奇から指腹結婚のことが演じられ、方成培『雷峯塔』伝奇・小説『雷峯塔奇伝』・弾詞『義妖伝』・小説『白

蛇伝』前集・弾詞『白蛇伝』はいずれもこの場面を設けている。

なお弾詞『義妖伝』では出産の場面が特に設けられて（三十八回「産貴」）、白氏が陣痛が始まったので、許仙に産婆を迎えに行かせるが、陳彪がそれを遮り、もし生まれる子が蛇の子であればどうすると脅したため、許仙が産婆を迎えに行かず、結局小青が代役を務めるという内容が演じられ、許仙の優柔不断さを批判的に描いている。これを小説に改編した小説『白蛇伝』前集も同内容である。弾詞『白蛇伝』にはこの場面はない。

（十）　白蛇の精の鎮圧

白蛇の精は法海の金鉢によって調伏され、雷峯塔の下に鎮圧される。

話本「白娘子永鎮雷峯塔」では、白娘子は許宣が呼蛇者を呼んだことを叱り、仲良くしなければ杭州の百姓を苦しめると言って脅す。李募事は許宣に借金の取り立てを口実に白蛇の精である白娘子から引き離そうと図るがいつの間にか証文が消えており、許宣は仕方なく法海を浄慈寺に訪ねる。許宣は法海から鉢盂を受け取り、法海の指示どおり、それを密かに白娘子の頭に被せると、白娘子は鉢盂の中に収まる。法海は掲諦神に白娘子と青青の正体を現させ、雷峯寺の前に鎮圧する。許宣は托鉢して七層の塔を建て、出家して後に坐化する。黄図珌『雷峯塔』伝奇でもほぼ同じ内容を演じるが、李募事の画策のことは演じず、許宣は白娘子の脅迫を聞いて法海を訪ねる（「捉蛇」齣）。

旧抄本『雷峯塔』伝奇では、李募事が蛇捕りを呼ぶこと、白娘子が許宣を脅すことは演じられない。ただ前述のように白蛇の精が若者の子を出産するとすることは『白蛇伝』史における大きな変化であり、法海は白娘子に文曲星が投胎していたため、出産一月後に来訪して鉢盂を許宣に渡すのである（「付鉢」齣）。許宣は出家するに当って子を姉に託し、白氏の肖像画と自分の毛髪を形見に残して去る。子許士蕣は朝廷に雷峯塔を破壊して母を救出するよう請願するが許されず（「奏朝」齣）、塔を祭ると掲諦神が鏡で白氏を照らして母子を引き会わせる（「祭塔」齣）。方成培『雷峯塔』伝奇もほぼ旧抄本『雷峯塔』伝奇と同内容であるが、やや異なる点は、白氏の出産半月後に許宣が自主的に浄慈寺を訪ねるとし（「重謁」齣）、法海が雷火二神に命じて白蛇を雷峯塔下に鎮圧し三昧の真火で焼かせる（「煉塔」齣）ところである。なお後者には雷峯塔を焼かれた由来を説明する伝説が反映している。

小説『雷峯塔奇伝』では、法海は許宣を欺いて水を入れて欲しいと鉢盂を渡し、それが白氏の頭を被うとする。白氏は前述のように許仙への報恩のために下界へ降りたと皆に告白する。白氏が鎮圧され許仙が出家した後、子夢蛟は学校で蛇の子だとからかわれ、許氏から真実を聞いて、病床に伏すが、観音菩薩が道士に扮して夢蛟を治療する（第十二回）。夢蛟は状元に及第し、帰途金山寺で僧道宗と父許仙に会い、杭州へ連れ帰る。雷峯塔で母を祭ると、法海が

空から降りて来て、夢蛟と白氏を引き会わせ、許仙と白氏を昇天させる（第十三回）。

弾詞『義妖伝』ではこの場面はさらに大きく発展し、白氏・法海・小青・許氏・夢蛟など登場人物の描写に力が注がれる。すなわち、白氏は産後一月して去る日が近いことを自ら悟り、子に形見として七歳までの衣服七着を作る（第三十九回「成衣」）。法海は夢神に命じて白氏に変身して許仙の夢に入らせ、白蛇の精と名乗って許仙を呑み込ませる（第四十回「驚夢」）。白氏の産後一月の祝いの日、白氏は許仙の手で災禍が降ることを占いによって知り、許仙を身辺に引きつけて置こうとするが、許仙が急用で外出する際、法海が空から降りて来て、皆の前で白氏が白蛇の精で金鉢で調伏できると公言する。皆は真実かどうか確かめればわかると言って許仙に試させると、金鉢は果たして白氏の頭を被い、白氏は許仙に正体を告白して別れを告げる（四十一回「飛鉢」）。小青は駆けつけて許仙を罵り、青蛇になって許仙を呑もうとするが、白氏に遮られて玄山黒風洞に去り、法海への復讐のために修行に励む。法海は白氏に蛇体を露呈させ、鎮江で多くの生霊を犠牲にした罪で雷峯塔に鎮めると告げると、姉許氏が許仙を責め、法海を罵る（第四十二回「鎮塔」）。法海は仕方なく皆を雷峯塔に案内し、そこで白氏を人間の姿に戻して自ら事の真相を説明させ、許氏を納得させる。法海は禅杖で地面を開いて白氏を鎮める。法海は許仙に三年後の再会を約して空中に去る（第四十三回「遺容」）。許仙は子に白氏の肖像画と自分の頭髪を残して出家する（第四十四回「剪髪」）。子夢蛟は七歳になり、学校で蛇の子だといじめられる（第四十五回「鬧学」）。夢蛟は許氏から真実を聞き出して悲しみ、法海を罵る（第四十六回「盤姑」）。夢蛟は雷峯塔に行って泣き、頭をぶつけて死のうとするが、陳彪と許氏の言に思い直して学問に専念する（第四十七回「哭塔」）。小青は十四年の修行を終えて法海を捜して雷峯塔に来るが、塔を動かせず、火をつけて焼く（雷峯塔が焼けた所以）。法海は小青を白玉の瓶に捕らえるが、そこへ観音が降りて来て、慈悲の念を起こし、南洋へ連れて行く（第四十八回「収青」）。夢蛟は十九歳になって科挙を受験するために上京するが、途中で鎮江の金山寺に立ち寄って法海のことを尋ねる（第四十九回「逼試」）。そこで夢蛟は許仙と父子の対面を果たす（第五十回「見父」）。夢蛟は状元で科挙に及第し、天子は白氏を哀れんで雷峯塔のそばに牌坊（功労を表彰するアーチ）を建てさせる（第五十一回「考魁」）。夢蛟が白氏を祭ると法海が現れ、地下から白氏を出して夢蛟と対面させた上で、白氏を西天へ導く（第五十二回「祭塔」）。なお小説『白蛇伝』前集も以上と同じ内容である。

弾詞『白蛇伝』は結末をハッピーエンドに変えている点が大きく異なる。

白氏の出産一月の祝いは杭州の習慣によって二十九日目に行われた。そして白氏は別離の時期が到来したことを覚悟し、産後一月は髪を梳かないという習慣に背いて髪を梳く。法海は宴席に現れて許

仙に妖怪の調伏を命じるが、許仙に拒絶されると、子供を守ると欺いて、金鉢を寝室に置かせると、金鉢はたちまち白氏の頭を被う。白氏は小青に観音菩薩の救済を求めさせ、許仙に自らの正体を告白して別れを告げる。この段は清朝の大官夫人を怒らせたという。以下は弾詞『義妖伝』と同じであるが、相違する部分を指摘すると、最終回の第三十二回「団円」では、自分が白氏の子であることを知った夢蛟は頭突きで雷峯塔を開けようとし、土地神がこれを城隍菩薩に伝え、城隍菩薩がこれを玉皇大帝に上奏したため、玉皇が母子を夢の中で引き会わせる。天子は状元で科挙に及第した夢蛟が雷峯塔を壊して母親を救出し、金山寺に出家した父親を還俗させることを許す。塔を壊そうとすると法海が現れて塔を焼こうとするが、観音菩薩の浄瓶の水で火は消える。観音は小青から知らせを聞いて駆けつけたのであった。法海は観音の命令に従わず、小青に金鉢を被せようとすると、観音が鉢を奪って遮り、鉢は如来に返還される。法海は小青に追われて蟹の腹中に逃げ込んだ（これは伝説を取り入れたものである）。許仙と白氏はもとどおり夫婦に戻る。

四　むすび

以上のように、『白蛇伝』は最終的に動物報恩譚となった。そして『白蛇伝』では時代が下ってもまだ蛇の毒性が否定されず、それが恩人の救済に役立つものとして肯定されている。これは人間よりも強い存在として動物が存在した時代のトーテム信仰の名残と見ることができよう。だが蛇が毒性を失わないゆえに、また人間から警戒されることにもなる。作品群の中で宗教者が高い地位から下落することがないのはそのことを意味している。

『白蛇伝』は『中国民間文学大辞典』（姜彬主編、上海文芸出版社、一九九二）には「動物女故事」（五五八頁）に分類されている。その解説を訳すと、以下のとおりである。

動物女故事は、又異類変形婚配故事とも称する。民間童話の一類である。広範に流布しており、数量も比較的多い。内容は、動物が報恩・愛慕・同情等の動機から美麗な娘に変身して貧しい男子と結婚し、神秘的な力量を発揮して邪悪な勢力に打ち勝ち、夫が窮地から抜け出す手助けをすることを描写するものであり、人々の幸福な生活に対する憧憬を表現している。多くの作品がタブーを犯したため動物女が去って行くストーリーを有し、夫妻が別離することで話が終わる。比較的早い記録に、唐薛用弱『集異記』中の『崔韜』、唐皇甫氏『原化記』中の『天宝選人』等がある。著名な伝説『白蛇伝』もこの類の故事が発展したものである。現代の口頭で採録した代表的作品に『虎女』『鹿姑』、高山族の『鹿姑娘』、蒙古族の『神鹿』、彝族の『大雁姑娘』、朝鮮族の『蛇姑娘』、チベット族の『小金魚の宝箱』、カザフ族の『狼姑娘』等がある。

ただ『白蛇伝』はまた「動物報恩故事」「動物仙仙話」とも言え

る。「動物報恩故事」について上記『中国民間文学大辞典』（五五九頁）には次のように説明している。

民間童話の一類であり、広範に流布している。内容は動物が人の恩恵を受けて恩返しし、あるいは宝物や高価な礼物を贈って人に幸福をもたらしたり、あるいは様々な策略をめぐらして人の願望を実現させたり、人を危難から救い人の怨恨を晴らしたりすることを描写するものであり、善を行えば福を得、恩には報ゆべきという伝統観念を表現している。また善には善の報いがあることを表現する常套手段でもある。報恩の動物は虎・蛇・魚・鳥・蛙が比較的多く見られる。

また「動物仙仙話」（七四頁）には次のように言う。

仙話類型の一。魏晋以後の仙話の一種の変形であり、人が仙になれるばかりでなく、動物も数千年の修練を経て仙になれると考え、様々な動物仙が出現した。とりわけ狐仙の影響は最大である。これらの神仙はすでに動物の習性をなくして人の特質を具え、善良で、よく変化し、人に喜ばれる。その基本的な構造は、①報恩―たまたまもとの姿を現して猟師またはその他の動物に傷つけられ、危ういところを通りがかりの人に救われる。彼は報恩のために身体を許したり、金銭宝物を贈ったり、困難を解決してやったりする。例えば江蘇連雲港に流行する『石蛤蟆』がそれである。②婚姻恋愛―動物仙は人間生活を羨んでひそかに下界に下り、人間の若者と夫妻になり、甚だしきに至っては身を犠牲にすることを惜しまない。③悪を懲らしめ、民のために害を除く。

『白蛇伝』にはこれらの類型が混入しているが、全く毒性を克服した動物とは考えられていないばかりか、常にその毒性に注目して物語が構築されていったことは本論で述べたとおりである。官庫から銀を盗むという行為は明らかに悪行であるにも関わらず、この部分が抹消されることなく白蛇の精が貧民を救済する手段としてやむを得ない行為と認められたし、弾詞が白蛇が毒液を城中に散布する場面を設定したのも、蛇を毒性を有する動物と考える観点が根底にあったからに他ならない。もちろん端午節に魔除けの雄黄酒を飲まされて蛇体を露呈して若者を死なせる場面や、天の薬草を盗む場面もこの蛇の毒性を意識することなしには出現しない。また蛇は水神としても崇められており、風雨を起こして洪水を起こすストーリーもこれによって大きく発展し、しかもそれを根拠に白蛇の精が生霊を殺傷した大罪で高僧に鎮圧されるのである。以上を要するに『白蛇伝』は白蛇の毒性に対する期待と恐怖が反映した物語だと言える。